

中国における「池田思想」研究の動向（2）

高 橋 強

1) 2005年10月14日北京大学で、北京大学日本研究センター「池田大作研究会」と本学との主催による国際シンポジウム『21世紀への対話』と現代社会が開催された。11大学47名の学者が集い、20世紀最大の歴史家であるトインビー博士との対談集をめぐって討論された。なお池田研究の機関としては、北京大学・池田大作研究会、湖南師範大学・池田大作研究所、安徽大学・池田大作研究会、肇慶学院・池田大作研究所、杉達学院・池田大作教育思想研究センター、中山大学・池田大作とアジア教育研究センター、華中師範大学・池田大作研究所、中国文化大学・池田大作研究センターが参加した。同シンポジウムで発表された8篇の論文の要旨は以下の通りである。

「トインビー、池田対談『21世紀への対話』の観点と予言」張鏡湖（中国文化大学）

『21世紀への対話』は、人生と社会、政治と世界、哲学と宗教の三大問題をとりあげ、人心と世道の憂慮に配慮しながら、深い洞察と鋭い分析に貫かれた極めて有意義な討論である。

1. 「依正不二」

これは仏教哲理で、「依報」とはすべての人間と自然環境のことで、「正報」とは「生命の主体」である。両者は異なるものであるが、その存在と発展の過程においては一体に融合され、不可分のものとなる。これは即ちトインビーの言う「挑戦と応戦」の概念である。文化の発生と興亡は人類と環境の相互作用であり、優劣による勝敗は必須のことである。

2. 東西の宗教の違い

欧州の宗教は「人格神」を崇拝する一神教であるが、アジアの宗教は「非人格神」の多神教で、互いの神々を受け入れて共存する。それに対し、人格神の宗教は異民族の共存共栄を可能にすることが困難な場合が多い。

3. 暴力事件の増加

トインビーは今後世界で暴力事件が頻発するであろうと予言したが、9.11事件はその一例である。これはハンチントンの言う「文明の衝突」の実例であろう。

4. 中国政治勢力の台頭

トインビーは、アジアには歴史的遺産が多く、世界統一の地理的文化的軸になり得ると言っている。そこは多神教、人道主義、合理主義の世界である。中国がアセアンに加盟し、日本や韓国と連携すれば、アメリカや欧州連合と並ぶ大きなグループが形成される。

5. 中国の経済発展

トインビーは「中国の経済力はいまだ十分に強力ではない。しかし中国の経済は必ず発展する」と予言した。1978年から2004年までの中国のGDPは毎年平均9%増加し、世界のトップを走っている。

以上、トインビーと池田は、複雑な国際関係と五大文明の発展の趨勢を透徹した慧眼で考察

したが、なかんずく中国の未来の発展に対する予言はまことに深淵なものがある。

「池田大作氏の調和理念——『21世紀への対話』からの解析」賈蕙萱（北京大学）

『21世紀への対話』の中で、池田とトインビーは人間と自然、人間と環境、都市と農村、知識人と大衆、医者と患者、科学と宗教等の多くの社会問題を語っている。これら対立矛盾する双方を、両氏は示唆に富む調和理念を用い、それら双方の長所を取り入れ短所を補い、平和的に問題を解決することを主張している。本論は主として池田の調和理念を考察したものである。

1. 人間と人間の調和

平等は人間と人間との調和を実現するための重要な要件の一つである。それでは人間は何において平等な存在であろうか。池田はこの点に関し「最高にして最尊の宝は、この生命以外に断じてない。この単純な事実、に、いっさいの原点をおくべきである」と述べる。トインビーも「生命の尊厳こそ普遍的、かつ絶対的な基準である」と述べ同意している。価値観の多様化が叫ばれている今日においても、池田は「価値の多様化を認めても、それを包含する共通の基盤となるべき価値観が必要である。そうした基盤がなければ、人間相互の信頼と協調は成立しない。それは結局、人間としての価値であり、生命の尊厳ということになる」と述べ、生命の尊厳という根本的次元での人間の平等を強調する。

2. 人間と自然の調和

池田は仏法哲理を引用し説明している。即ち「人間は、自然と融合して初めて、ともに生を営み、自然を享受できるのであって、それ以外に自己の生を創造的に発揮させる方途はない」と。人間と自然は互いに対立するものではなく、互いに依存しているという自然観である。そして現代科学文明が自然を破壊している原因として2点あげている。1つは、自然も人間生命と相互に関連しながら一定のリズムを保った“生命的存在”であることを忘れてしまった点である。もう一つは、自然界を人間のために奉仕させるのは当然であるという考え方が底流に存在した点である。

3. 人間と宇宙の調和

現代文明は様々な欲望を人間生命から無制限に引き出し、それは人間同士の対立抗争を、また人間と自然、人間と宇宙の不調和を生み出している。両氏は欲望を「愛に向かう欲望」と「魔性の欲望」に大別する。池田は、この「魔性の欲望」は人間生命に本来内在するものであって、消滅してしまうものではないので、この欲望の生命をいかに人間、社会、宇宙に対して有益になるようよき方向に導くことが重要であると考ええる。池田は欲望の克服について次のように述べている。即ち「大乘仏教では、無我論を唱えたり、欲望の消滅をめざすのではなく、宇宙や他の一切の生命と自我との調和・融合を説き、そこに人生における理想的な幸福があると説いたのです。このための実践が慈悲による“利他”にあるとして、欲望はこの高い理念の実践によって、自然に克服されるとしたわけです。つまり大我（宇宙的・普遍的自我）に目覚めることによって、欲望と結びついた小我（個人的自我）を克服することを教えたのです」と。

「21世紀の予言——『21世紀への対話』発刊30周年を記念して」蔡德麟 楊君游 蘇衛平（清華大学深圳大学院、深圳大学）

トインビーと池田大作両氏は、何れも学識豊かな学者であると同時に、世の乱れを悲しみ、民の困窮を哀れみ、世界に関心を注ぐという大きな度量を具えているが故に、両氏は20世紀の豊かな歴史経験に基づき、人類の新しい世紀を眺望・観察しつつ、人類社会や現代の世界にお

ける最も根本的な問題を直視することで、人類にその前途を洞察する智慧をもたらした。

トインビーは、以下の3つの理由で、池田を対談者として選んだ。1つは、対談の内容が、新たな世紀において的中するか否かを検証する歴史的証人となつてほしいという願望からである。2つ目は、池田が東洋の文化的背景と宗教的背景を十分に持っていたからである。3つ目は、対談者としての能力を十二分に認めかつ信頼を寄せていたからである。

歴史は正に両氏が予言した如く、本書は世に現れて以来、世界の幅広い関心と呼び、潮の如く好評を博している。世界の24の言語に翻訳されていること、また世界の多くの識者からの評論を一言で纏めるならば、本書は世紀的な影響力を有する「人類の教科書」といっても過言ではない。

金庸氏は次のように評価しており、極めて興味深い。即ち「本書は人生に対する哲学的観点において、多くの重要な示唆を与えるものである。21世紀の幕が開かれようとしている今日、改めて本書をひもとく事により、我々はそこに示されている観点到驚きを感じるであろうと同時に、それらを実現する為に努力すべきであるとの考えを抱くに相違ない」と。

「池田先生の仏教的生命価値論から見た生命に寄せる関心」張懷承（湖南師範大学）

トインビー・池田対談は、「人類の生命の終局に対する関心」という回答を我々に提供してくれた。池田は仏教学者として、深く生命の本質を把握し、人類の生命に対する関心事を積極的に探求し、仏教的生命価値論を高揚している。

仏教は二つの面から生命の価値を判断している。一つは存在意義において、また一つは本来の意義においてである。前者は即ち煩惱をさし、池田は、煩惱は六道の支配を受けるものとらえた。後者について、池田は有無概念を超越した「空」の概念でとらえている。

人類が幸福を追求することは、自身の生命価値に対する肯定である。それは生命と幸福が永久に続くことへの期待を含んでいる。しかし、いかなる生命でも死に向かうことは避けられない。仏教は死を恐れることには必ずしも賛同しておらず、死は人間に明示されている生命に対する意義を強調する。池田は「死を排除せず、死を正視するのです。正確な生命観、生死観、文化観を確立するのが、21世紀の最大の課題である」と述べている。

池田は大乗仏教の「生死不二」に基づき、「生と死は時間と空間で二つの異なる形態を表し、死は生命の冥伏状態であり、冥伏は無という意味ではない」と述べる。さらに池田は、生死の流転を主張するばかりでなく、生と死の境界線を打破し、生と死は一つに貫かれていると強調している。

仏教の根本の教義は、人間の生と死を看破し、人生の困難から解脱することである。池田は「人類の生命は、個別の存在だと考えている。と同時に、死後は生命の深いところ、即ち宇宙生命に溶け込んでいくと考えている」と述べ、宇宙生命に溶け込んだ個別の生命の永遠なる存在を明示している。

「池田大作における教師の“専門化思想”を探る」曾崢（肇慶学院）

1. 教職は一種の“神聖”な専門職である

池田は一貫して、教師という職業を神聖な職業としてとらえている。さらに「未来を担う青少年の人格形成という重要な仕事に従事する教師に“聖職”であるとの自負と情熱がなくしては、実りある教育活動が期待できるわけがありません」と主張する。その上で、本質的には教職は一つの専門職としてとらえられるべきである。教師という職業が担う社会的責任は、他の

如何なる職業も替わるこのできないものである。

2. 教師は高い専門的資質を具えていなければならない

教師の専門化は資質の高い教師を求めている。資質の高い教師とは、知識、学問があるだけでなく、道徳心があり、理想や向上心がある人間であり、学問においても優秀だけでなく、生涯学習の実践者であり、絶え間なく自身を向上させる人間である。池田はさらに、教師は教養に溢れ、教育は愛の共鳴であること、つまり心と心の呼応であり、人格的魅力によって青少年を教育するものであることを、強調している。と同時に「確固とした教育理念を持つこと」、即ち人間に対する徹底して深い洞察力と理解力を持つことも重視している。

3. 教師は教育者であるばかりでなく、研究者である

池田によると、教育機関と研究機関が分離された場合、教育機関の重要な構成員である教師の教育活動が、研究活動と分離されてしまう。それは現代教育の要請と相反するものである。教育活動と研究活動の隔絶は、必然的に、教師が時代とともに不断に自己の教育観を変化させ、新たな教育内容を増やし、教育方法を改善していくことを妨げる。これらの観点は、教育の法則に対する池田の造詣の深さから生まれるものであり、“教師”についての深い洞察が現れている。ここに池田の“現代的教師観”を見出すことができると同時に、教師に対する一種の教師の専門化を追求する上での思想的背景をも見出すことができる。

「21世紀大学教育の展望——トインビーと池田大作という両智者からの啓発」林彩梅（中国文化大学）

1. 理想の大学教育

（1）教育の目的。 トインビーと池田大作という両智者からの大学教育の目的、教員の持つべき教育理念に対する啓発は、以下の通りである。即ち、ただ専門知識を学生に伝え授けるだけでなく、さらに学生に学問を求める目的を教授し、さらに自己の利益を広げるばかりでなく、社会貢献への行動の拡大とそこで学び得た学術と技術が、他者を守り助け、ひいては国家社会に大きな利益をもたらすことができることを教授することである。

（2）生涯教育。 理想の教育は、一人の人間全体における終生教育でなければならない。学問と経験を持ち合わせたその成果は、さらに非凡なものである。ただし、終生教育を完善な形で教育政策に組み込み実施している国は少ない。

（3）教育者と研究者。 研究と教育を、相互に交流させていかななければならない。専門の研究機関以外に、大学での研究と講義の合一は、最も重要なものである。大学教員は、学識を広めるために積極的に研究し、その研究成果を学生や一般大衆に教授し、また彼らの反応から、再度自己の研究成果を見直し、研究の新たな観点を見出していくべきである。

2. 大学教育の資金源問題

国は政府と企業のコントロールを受けない財政資金を設け、撤収不可の寄付基金制度を設置すべきである。政府や企業は大学に経費補助や寄付をしても、それは研究と教育のレベルを向上させることが要求されるだけであり、大学の学術の自由な発展に干渉すべきではない。

3. 知識分子の教養

知識分子といわれる人たちの教養は、大衆生活を舞台とすべきで、それによって初めてその知識と智慧が発揮され働きをなす。大衆は根で、知識分子は樹木から咲きた花であり、両者が隔離してしまえば、互いに自己の根を絶ってしまうことになり、それは社会にとってすでに不健康であることを示している。

4. 科学思惟法と人間思惟法

科学研究の機能には限度があり、人類が最も関心のある大事にいたっては、科学は完全で明確な回答を与えることはできない。科学思惟法は、「定量」処理の対象に対しては、理性の光で分析を進め、その見出した法則を「科学の眼」と称する。科学の眼は対象を定量化するが、定量化できない特に「人を対象」とする時、その精神、感情、意思など微妙な性質は、「人間思惟法」からの人間性に対する深い探求が必要である。

「池田大作の教育思想の特徴をめぐって」王麗榮 李萍 鐘明華（中山大学）

1. 池田教育思想の主な特徴

(1) 「人間主義」の教育目的。池田はその目的を「教育の根本課題は人間として如何にあるべきか、人生をどのように生きるべきかという、人間にとって不可欠の問題を解明し回答を与えるところにある」と主張する。しかしながら20世紀世界では、その教育が常に何ものかに従属し、何ものかの手段に貶められてきたという反省にたつて、21世紀には「教育のための社会」を目指し、人権や国境を越えて結びつき絆を深め、自然とも共生のハーモニーを奏でていけるような人格を形成していくことこそ、新たな教育のあり方であると強調している。

(2) 心の教育を重視した教育内容。池田は、教育の内容は掘り下げて言えば“知性”と“心情”の教育であると考え。特に心情とは、人間的な心の豊かさの意味であり、人間の条件であると見なしている。しかしながら教育の経済至上主義が、人間自身の心の中から、思いやりとか、誠意とか、愛情とかの人間固有の豊かさを排撃している現状を憂慮している。

(3) 個性を尊重する教育方法。池田は個性教育を非常に重視し、個人がそれぞれの分野で自分らしい花を咲き誇らせていくことを主張している。というのは、教育は一人一人異なった性格をもつ人間が対象であり、絶えず変化をするもので、教師の学生の個性を尊重する姿勢が、学生のその後の育成に極めて重要な影響を与えるからである。

(4) “三位一体”の教育を重視する。三位一体とは学校、家庭、地域の三者の連携のことをいう。池田は学校教育と家庭教育の関係について、前者は人間の知能の開発に重点をおき、後者はもちろん“情”と“意”に重点をおくべきであるが、全人的成長のための教育に力を注ぐべきであると指摘している。社会は、親および未来の親を対象とした学習の機会を提供し、正しい教育理念をもち、教育方法を学習できるよう援助すべきである。

2. 池田教育思想の思想的背景

(1) “人間主義”教育思想の理論的原点：“生命尊厳”の人間学思想
池田の人間学思想の核心は“生命尊厳”であり、人間と自然の融和、世界平和と人間革命の提唱である。更に氏の人間学思想および哲学的基礎は宇宙生命観に見いだされる。

(2) “人間主義”教育思想の土台：歴史の教訓
中日両国に見る教育の目的は、国家の独立とその建設のための経済活動を重視してきた。つまり教育の政治的、社会的、生産的機能を重視し、人間の自我の覚醒や個人の自立・発展を軽視し、その結果、教育は国家や社会の“道具”と化してしまった。池田は“教育のための社会”を強調する。

「池田大作の歴史文化思想——『21世紀への対話』を再読して」陳鋒（華中師範大学）

『21世紀への対話』は多くの分野に触れているが、本論文は、池田の歴史文化思想の視点から考察したものである。その理由として、氏は歴史学者ではないが、氏の思想文化、人生の価

値、人類の理想への関心やトインビーという歴史学者との対話という視点からすると、歴史文化への渉猟を抜きにして本書の編纂は不可能であるからである。氏の歴史文化思想は、2つの面において顕著である。1つ目は、愛国主義と民族意識。2つ目は、人生の価値と社会の発展である。

1. 愛国主義と民族意識の弁証法的解釈

祖国を愛すること或いは愛国主義というものは、伝統的美徳であり、或る意味からするとそれは、国家の統一、社会の安定や発展への保障でもある。しかし一方において「国家主義のもとに、どれほど多くの青年たちの純粋な愛国心が歪められ、利用され踏みにじられて来た事か。そこでは自己の生存する社会への純粋な愛であったものが、他国民への憎悪ないし蔑視に変わり、自己と社会の共存の理念であったものが、いつの間にか国家社会のための自己犠牲へと変質していった」（池田）という歴史が存する。氏のこのような見解は、「愛国主義」に対する弁証法的解釈であり、また歴史上の全ての侵略戦争に対する理性的な総括であり、批判であると見なすことができる。なお民族意識と愛国主義には共通点が多い。

2. 人生の価値と社会の発展

人生の価値と社会の発展に対する探求は、池田の歴史観の基本的内包である。人生の価値について、氏が最初に強調するのは「生命の尊厳」であり、「生命の尊厳に至上の価値を置くことを、普遍的な価値基準としなければならない」と考えている。更にその生命の尊厳は、人間の使命や人生の目的や理想と結びついたものでなければならないと述べている。その一方で、「魔性の欲望」に起因する醜い生命の葛藤の歴史を歩んで来たことも明らかにしている。氏は人間自身の善悪について「人間の本性は性善でもなく性悪でもなく、むしろ性善も性悪も共に具わっていると」考えている。氏はトインビーとの対話のなかで、「魔性の欲望」が存在するからには、「愛に向かう欲望」を用いてそれに取って代わらねばならないと主張する。両者はその方途として3点をあげている。1点は、宗教の役割を重視することであり、2点目は、優れた精神遺産および文化的伝統の継承および発揚であり、3点目は、教育の役割の重視である。社会の発展は人間の行為と切り離す事のできないものであり、人生の価値を正しく認識し、人間の行為を正しく規範化しかつ導くことにより、社会は初めて正しき方向へと発展し得ることができるのである。

『21世紀への対話』における育児論、産児制限論について」高橋強（創価大学）

トインビーと池田の論じた育児論と産児制限論は、どちらも来るべき21世紀を洞察した内容であった。特に前者については、育児における母親および母親業に対する最大の賛辞や評価は注目に値する。両者は「女性本来の、生命の尊厳を守り、育み、大事にしていくという特質は、それ自体、人類にとり、人間社会にとってきわめて普遍的な重要性をもっている」という点で一致している。今後この考え方を基にして、男性中心型社会の更なる変革が必要となるであろう。なお池田は、一方女性に対しては、女性独自の潜在的能力を発揮する自由を勝ち取る努力も期待している。真に男女平等を創造するうえで重要な視点である。

後者については、産児制限容認の根拠に特に注目したい。そこには、個人は全体に通じ、また全体は個人に通ずるといった思想がうかがえる。個人レベルでの産児制限が、人口爆発で飢餓に苦しむ多くの人々を救済することになり、またそのことが逆に個人を救うことにも繋がるのである。ただし、生命の尊厳を、相対化するものではないことは、断っておかねばならない。胎児の生命の尊厳性を認めているのである。

子供をできるだけ産むという衝動は、トインビーが言うように本来、人間にそなわった衝動であるがゆえに、どのように衝動を克服するかが重要になってくる。池田はつぎの2点を提起している。1点は、「同苦」の感情を持てるようになることである。自分以外の存在の苦しみをみて、そこに自らも苦しみを感じるという感情である。同苦が根底にあってこそ、人間における集团的連帯も成立するのである。

もう1点は、欲望と結びついた個人的自我（小我）が、普遍的・宇宙的自我（大我）に目覚めることにより、欲望を超越するということである。即ち、個人的自我は欲望の消滅をめざすのではなく、他の一切の生命や宇宙との調和・融合をめざし、同苦に基づく行動を行うことにより、欲望の超克が可能になるのである。これらの提起について、トインビーも共感を示している。

トインビーと池田の論じた育児論、産児制限論は30余年を経た今日においても、多くの示唆を与えている。

なお上記発表論文の他に、以下の論文が寄せられた。

- 「20世紀の倫理の先覚者——『21世紀への対話』を読んで」王澤応（湖南師範大学）
「『21世紀への対話』——東西智慧の結晶、文明対話の教典」冉毅（湖南師範大学）
「人間と自然の共存共栄——『21世紀への対話』における池田大作先生の生態道德観」
黄富峰（湖南師範大学）
「戦争は心に始まる——池田大作先生の戦争倫理観」曾小五（湖南師範大学）
「池田大作の“妻子幸福”観——トルストイとの比較」陳愛香（肇慶学院）

2) 2005年11月15日、20日台北にて、北京大学池田大作研究会、湖南師範大学池田大作研究所、中国文化大学池田大作研究センターおよび本学の代表が学術交流を行った。15日には、賈蕙萱教授（北京大学）が中国文化大学にて「池田大作氏の調和理念——『21世紀への対話』からの解析」と題し講演を行った。20日には錦州会館にて学術セミナーを行い、4つのテーマのもと6名の学者が研究成果を発表した。

- 「新時代の女性の使命『香峯子抄』」賈蕙萱教授（北京大学）
林彩梅教授（中国文化大学）
「中国大陆における日本語教育発展の状況」澎広陸教授（北京大学）
「兩岸の大学教育における人格養成について」唐彦博教授（中国文化大学）
「池田会長の教育観から21世紀の思想の潮流を論ずる」
王澤応教授（湖南師範大学）
劉混輝教授（中国文化大学）

3) 新たに設立が公表された池田研究機関は以下の通りである。

杉達学院・池田大作教育思想研究センター（2004年8月設立）

2004年6月、同学院は本学創立者池田大作博士に、同学院の名誉教授の称号を授与した。その過程において、同学院の袁济学長をはじめ関係の教職員が池田博士の教育思想と教育理念に強く関心を持ち、池田博士の教育思想と教育理念を研究するために、また日本の教育を研究す

るために、「池田大作教育思想研究センター」を設立した。

〔組織機構〕

同センターは、同学院直属の研究機構で、センター長は袁済学長、顧問は強連慶副理事長、幹事研究員は王鴻祥兼任助教授（復旦大学日本研究センター兼任研究員）、兼任研究員（日本語学科中心）は十数名。

〔活動〕

学院内での研究活動を中心に、中国国内外の池田大作研究機構と学術交流を推進し、国際学術シンポジウムの開催も目指す。池田博士の著作を基本にして同学院図書館に「池田大作文庫」を設立する一方で、池田博士の著作を翻訳し出版する。

中山大学・池田大作とアジア教育研究センター（2005年6月設立）

学術研究を中心として、池田大作先生の思想を総体的にまた深く研究し、中日およびアジアの教育発展戦略を研究討論するために設立された。更にこれらを通し中山大学と創価大学との学術教育交流を促進する。

〔組織機構〕

名誉センター長は李萍副学長、センター長は鐘明華教育学院院長、常務副センター長は王麗栄教授、兼任研究員（教育学院中心）は数名。

〔活動〕

主要な内容は2、3年に一度、学術シンポジウムを開催し、論文集の出版をする。シンポジウム開催予定は以下の通りである。

第1回シンポジウムは、「池田大作教育思想研究」と題し中山大学で開催。第2回は、「中日の現代化過程における教育比較」と題し創価大学で開催。第3回は、「中日の学校道德教育の比較研究」と題し中山大学で開催。

華中師範大学・池田大作研究所（2005年6月設立）

池田大作先生の思想・哲学および具体的な教育理念を研究し、人類と社会の発展に寄与するために設立された。

〔組織機構〕

学術顧問は章開元元学長、名誉所長は馬敏学長、所長は陳鋒教授、副所長は李俄憲日本語学科主任、周洪宇教育学院副院長、兼任研究員は数名。

〔活動〕

4つの研究プロジェクトの下、活動を推進する。即ち「池田大作の平和思想と中日交流」、「池田大作の教育思想と実践」、「池田大作の歴史文化思想」、「池田大作の文学思想と実践」である。この他、『池田大作と“調和”』の執筆や、『創価教育発展史』の全集編纂も計画されている。

遼寧師範大学・池田大作平和文化研究所（2005年12月設立）

池田大作先生の、仏法を基調とし時代の潮流をリードする世界平和、人生観、教育、環境保護等に関係する思想体系の深い含意を発掘し、中国および世界の平和と発展、人類精神の進歩と完成等に対する重大な意義を探究するために設立された。

〔組織機構〕

学術顧問は孫立川博士、所長は曲慶彪学長、副所長は崔学森政治行政学院講師。

〔活動〕

7つの研究プロジェクトの下、活動を推進する。即ち「池田大作の世界平和主義研究」、「池田大作の現代仏教学研究」、「池田大作の人生観・世界観研究」、「池田大作の『子供の幸福を目的』とした教育思想研究」、「池田大作の美学研究」、「池田大作・創価学会と中日関係研究」、「池田大作の人間と社会・人間と自然の調和思想研究」（環境保護思想を含む）である。

4）中国の池田研究者が、本学にて講演を行った。

譚桂林教授（湖南師範大学）「池田大作の魯迅観」（2005年12月6日）

冉毅教授（湖南師範大学）「中国での池田大作思想研究の現状と展望」

（2005年12月9日）

王偉英助教授（北京華文学院）「生命の尊厳——池田大作先生の人間学思想試論」

（2006年1月13日）